

二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版

プリンセス狂想曲

※回イヤルウエディング※

小説 筆祭競介

表紙 里海ひなこ

挿絵 緑木邑

序章	北のプリンセス	006
第一章	少年王の戴冠式	012
第二章	貴婦人との初体験	045
第三章	チャイナドレスの房中術	077
第四章	お姉ちゃんと初恋の人	116
第五章	フィアンセとの別れ	167
第六章	ハーレム狂想曲	202
終章	ロイヤルウエディング	247

登場人物紹介

Characters



フィンゼルライン (フィン)

西国・バトルベルンの第四王子。年の離れていた兄三人が権力争いで相打ちし全員死亡。その心労がたたって父親も病死。突然に国王となってしまう。

かぐや 香虞夜

北国・ヤマトの姫でフィンの王子時代の許婚。フィンとは文通をしていた。女らしい優しい性格でなおかつとても凛々しい。

わいらん 玲爛

大陸で最も歴史のある東国・大華皇国の姫。とにかく高飛車で自分の国こそ最高と考えている典型的なお姫様。

リオネッセ (リオ)

西国の教会のシスターで大司教の娘。素晴らしい美貌で国民の気持は絶大。おっとりとした優しい性格。王子時代からフィンの姉的存在だった。

ゼシデリカ

西国大將軍の娘で、剣の腕は拔群。国王となったフィンの親衛隊隊長となる。騎士道精神に富んだ凛々しい性格で、フィンの初恋の人。

エルダ

先代西国国王の最後の愛妾で、西国後宮の総取締役。フィンの母親に恩があり、その地位を万全なものにするためお妃候補との仲を取り持とうとする。

「そなたは妾の夫となる男。この世で最高の快楽を得る権利があるのじゃ。妾はそのためになら何でもいたすぞ」

少し恥ずかしそうに囁かれたセリフを聞いてペニスを踏まれながらジーンとしていた玲爛が闇雲に傲慢なわけではなく、彼女なりの（かなりズレてはいるが）公平な価値観で行動していることがなんとなくだが感じられた。今まで『大国の傲慢姫』というレッテルを通してしか見ていなかった少女を、初めて自分と同じ人間として実感した瞬間だった。

「ひ、姫も……ひとりの……女の子だったんですね……」

「な、何を突然言い出すのじゃ、おかしな奴じゃな」

少年王のセリフに東国姫の頬が赤みを増す。

「ホレホレっ。これが東国秘伝の足技じゃ！」

その赤面を取り繕うように玲爛が小刻みに足を動かすはじめる。片足だけが発作でも起こしたようにブルブルと震えだす。土踏まずの窪みにびっちりりと嵌まっていたペニスも当然、そのスピードで扱われる。肉先から溢れる先走りの汁が潤滑油となり、どれだけ早く責められても痛みはなかった。

「くはああっ……こ、これ、す、すごいっ……うわっ……うわわわわっ！」

あまりに巧みな足技に耐え切れず、咄嗟に自分の股間を踏んでいる美足を掴んでいた。このままでは射精してしまう。そんな切羽詰まったフィンの表情を見て玲爛がジッと

いるわけがない。ニヤリと意地悪な笑みを浮かべると、細い足首を固定されたまま小さく形のよい足指をむきゅむきゅと動かし亀頭を弄ってくる。その動きに合わせて土踏まずの凹みも絶妙に動き、密着した肉棒を刺激する。

「ほれほれっ、これがいいのであるうっ！ 妾の足が気持ちいいのであるうっ！」
身悶えるフィンの姿を見て玲爛も興奮しているようだ。もともと責めっ気の強い姫様が、ますますその足責めを激しくしてくる。

「あつ、ダメッ、いくっ、いっちゃんそうっ！ 足の裏でいっちゃんそうだよおっ！」
溜まった状況のフィンはもうこれ以上、玲爛の足責めに耐え切れなかった。精通を経験したばかりで異様に敏感なせいもある。これ以上の刺激を阻止するために掴んでいた美足を、自ら股間に強く押しつけた。無意識に腰がヘコヘコと動き少女の足にごしゅごしゅとペニスを擦りつける。足の裏とはとても思えないしなやかでスベスベした肌の感触がたまらなかった。無駄な脂がほとんどない箇所だけに、ペニスを弾く肉の弾力も強烈だ。

ドレスのスリットから覗いている玲爛の美しい足を凝視しながら全身を息ませる。
「ああつ、あ、あし、あしが、あしのうらがあああつっつっ！」

絶叫しながら全身を息ませた。その直後、美しい小足にギュッと圧迫されているペニスの中を、欲情の肉汁が一気に駆け抜けていく。

どぶびゅっ！ どぶぶっ！ ぶびゅどぶぶっ！



凄まじい勢いで弾き出たザーメンが玲爛の足裏で爆ぜ、足の指の間からぶびっぶびっと噴出する。フィンは数日ぶりに体感する牡汁を吐き出す肉悦に酔いしれた。全身をプルプル震わせながら大華皇国第一皇女の足で絶頂し続ける。

「……これが男の精か……はあんっ。とても……ふううっ……熱いのじゃ。匂いも独特じやな……くふうんっ……妾の足がお主まみれになっておるぞ」

玲爛が甘い吐息混じりに漏らす咬きを聞いて我に返った。官能の閃光で真っ白に灼かれた脳裏に理性が戻ってくる。そしていまだに己の股間にぴっちり密着している美しい足を見下ろした。自分の掌にすっぽりと収まっている小さな足が、欲情をぶちまけられて粘度の高い白濁液まみれになっている。なんだかとてもいけないことをした気分だ。

「あ、あの……ごめんなさい……」と素直に謝った。

「ふふふっ。別に謝ることはないのじゃ。妾の足はもうお主のモノ。好きなときに今のをしてやるぞ」

てつきり怒られると思っていたフィンはキョトンとした。そんな少年王をほんのり頬を赤く染めた栗毛の姫君が汚れた足を拭きながらチラリと横目で見てくる。

ゾクリとするほど色っぽい表情だった。エルダに比べればまだまだ幼い少女なのだがそんなことは関係ない。まぎれもなく女の表情だった。玲爛から目が離せなくなってしまう。「しかし貧相な摩羅じゃったのお。その倍はある張り型で練習したのは無駄じゃった。

妾の夫になるにしては少々物足りぬな」

その物言いにムツとしたが、全く悪気のない玲爛を見て、プツと吹き出してしまふ。

「な、なんじゃお主は、妾の顔を見て笑うなど無礼ではないか」

「ははははっ、ゴメン」

玲爛はどこまでいっても玲爛なのだ。正王妃レースの渦中にいるというのに、自分に媚びるようなことも一切しない。この性格——こんな魂はこの世に一つしかない。なんだかほんの少しだけ、この傍若無人なお姫様に愛おしさを感じはじめていた。

「次はお主を妾のモノにする番じゃな」

そう言うといインの手をギュッと握り締めてきた。

「えっ、その、それってどういう……」

「本当に鈍い男じゃのお。妾とお主が『まぐわう』ということじゃ」

「ま、まぐわう……」

露骨な表現に腰が引けた。玲爛とするのが嫌なわけでは決してない。それどころか今すぐにも押し倒し、エルダと経験したあの凄まじい快感をこの東国の美少女と一緒に味わいたい。しかし一時の感情に流されて玲爛を抱くというのは、やはり他のお妃候補たちに悪いという思いがあった。

ゼシデリカ、リオネッセそして香虞夜。少なくとも玲爛よりは馴染み深い関係だった彼

女たちを差し置いて、一番最初にこの少女と関係するのは躊躇われる。が、しかし――。

「妾の足を存分に弄んでおきながら、今さら断れぬぞ」

「うっうぐう……」

それを言われると何も反論できなくなってしまう。そんな生真面目なフィンを見て玲爛がニコリと微笑んだ。

「ほんにお主は愛いやつじャの」

その表情と可愛らしい仕草に胸がドキドキと高鳴ってしまう。

――ほ、本当に僕……玲爛姫のこと……好きになりはじめてるのかも……。

「妾は『はつたいけん』じゃでの。……優しくいたせよ」

ほんのりと頬を赤く染め、自分をジッと見詰めてくる少女の姿に、心臓がドキーンと強く脈打った。普段の我が儘で傲慢な言動とのギャップにクラクラする。

――ゼシデリカさん、リオ姉、香虞夜姫。みんな……ごめんなさい！

フィンは玲爛の魅力に抵抗できず、気付いたときには彼女を両腕で抱き締めていた。

「うふふっ。お主もその気になったようじゃの。それでは夫婦の契りをいたすとするか」
興奮しきった少年王に抱き締められながら東国姫が熱っぽく囁く。

「は、はやく……姫としたい」

「焦るでない。少し待っておれ」

玲爛はそう言うと言つて片手をチャイナドレスのスリットにいれ、小さな布地を取り出した。やはり光沢のあるシルク製で、どうやらそれは下着のようだ。つまりあの豪華なスカートの下には今は何も身につけていないことになる。そう考えただけでフィンは鼻血を吹き出しそうなほど興奮してしまった。

「大華皇室秘伝の最も子宝に恵まれる体位でいたそう」

玲爛はコロンとベッドの上に横になり、そのままの勢いで肩をベッドにつけたまま腰を上げた。そして金糸のドラゴンが躍る深紅のスカートをプバツと開き両足を大きく開く。

俗に言うまんぐり返しのポーズだ。これが『最も子宝に恵まれる体位』らしい。

しかしこの光景の淫靡さは西も東も関係なかった。

「こ、これ、……何をマジマジと見ておるのじゃ……は、はやくいたせ」

いくら房中術に則っているとはいえ、さすがの玲爛もこのポーズは恥ずかしいらしい。顔を赤く染めながら行為を急かしてくる。

しかしフィンは東国姫の淫靡な姿に魅入ってしまった。

——こ、これが玲爛姫のアソコ……。

ほとんど平らな胸と同様股間も未成熟だった。完全な無毛状態で陰唇の厚みもほとんどなく縦に一本筋が走っているのみだ。フィンはエルダの女性器しか見たことがなかったが、これが同じ女性なのかと思えるほど違う。しかし興奮の度合いは変わらなかった。そのま

だ未成熟な秘部を見ただけで男根の肉先が弾けそうなほどパンパンに充血してしまふ。

思わず片手が伸びていた。

「きゃっ!? な、何をいたす、あふんっ、……ど、どこを触っておるのじゃ……。そ、そんなこと……練習ではしてないのじゃ」

恥ずかしがる玲爛にお構いなく指先で女の秘部を弄る。

ほとんど厚みがないにもかかわらず、大陰唇を指先で押すとぷにとした弾力がちゃんとあった。陰毛が全く生えていないため肌がとてもツルツルしている。

本能の赴くまま鼻息荒く更に指先をその狭間に向わせた。

——うわっ。見た目じゃわかんないけど入り口のところがじゅくじゅくしてる……。

幼い陰唇の割れ目に触れると指先が熱いぬめりに触れた。特別自分が何かをしたわけでもないのに、ちゃんと男を受け入れる状態になっている。後宮長に教えられたその意味を思い出し少年の顔はカーッと赤く火照っていった。

「ひ、姫っ！ ぼ、僕、もう僕っ！」

興奮で膨張しきった男根を慌てて幼い牝孔に向かわせる。まんぐり返しの両足を掴み玲爛の姿勢を固定すると、肉先を縦に割れた幼い牝裂にあてがった。不自然な姿勢で上下になった歳若いキングとプリンセスは一箇所で結合を開始する。

「はくううっ！ い、痛いっ……い、痛いのじゃ！」

下になっっている玲爛が悲鳴をあげる。それでも初体験の痛みについては十分覚悟していたのだろう。ペニスの侵入を止めるようには言ってこない。

キュッと下唇を噛み、気丈な表情をして自分を受け入れてくれる。

「くふああっ……す、すぐく……せ、狭っ……キツイっ……」

入り口部分の抵抗感は凄まじく、肉先をみちみちと音を立てながら埋め込んでいくような感覚は、エルダとのセックスでは味わえなかったものだ。しかしそこを先端が抜けると後は熱くぬるんだ膣壁が続いている。それでもすごい締めつけだ。やはり狭い。見た目と同様まだ成長途中なのだろう、女性器の構造自体がとても小さい。そのためしっかりと濡れた女肉が強烈にペニスを締めつけてくる。

——まるでおちんちんがぎゅううって握り締められてるみたいだっ。

それだけにセックスの一体感は凄まじかった。

埋めた男根が感じているトクントクンという鼓動が、自分の脈動なのか相手のものなのか区別がつかないほど、がっちりとして一体になっている。

視線を二人の結合部分に向けると赤い鮮血が一筋流れていた。破爪の証に違いない。幼い牝裂を引き裂くように埋め込まれている肉棒が、まるで凶器のように見えてしまう。

——本当に僕が……玲爛姫の初めてを奪っちゃったんだ……。

大華皇国の第一皇女を抱いた実感が、ペニスを引き絞るリアルな快感と混じりあい少年

王の官能を高く押し上げる。

フィンのはたつぷりとその一体感を味わってから、ゆっくり身体は動かしはじめた。ギシッギシッとベッドを揺らしながら、玲爛の身体を上から押し潰すように腰を振る。

「いっ、痛いのじゃっ！ あっああっ、で、でもっっ、い、痛いのにつ、あくうっ！」

栗毛の姫君は破爪の痛みに耐え切れなくなり両手両足をバタつかせはじめた。しかしまんぐり返しの姿勢ではどうにもならない。フィンも今さら腰を止めることができなかつた。「す、すごいよっ！ 姫の中、こ、こんなにきつく締まるなんてっすごいっ！」

悲鳴混じりに喘ぐ玲爛にお構いなく激しく腰を振り下ろす。ペニスでえぐればえぐるほど、若い蜜壺からは熱い愛液が滲み出しペニスの突入がスムーズになっていく。混じりあう二人の性器からぐちゅんぐちゅんと淫らな音が漏れはじめた。噴出する肉欲に突き動かされ、股間から迸る肉悦を食うことだけに没頭していく。

「そ、そんなに激しくっ、くふああっ！ や、止めるのじゃ、妾は妾わああっ！」

「無理だよそんなのっ！ 姫の中、気持ちよすぎておちんちんが止められないよっ！」
獣欲に支配された少年王は、更に激しく腰を振りたててしまう。

「あくああっ！ そ、そんなああっ！」

そう叫ぶ玲爛もいつもの傲慢なプリンセスではない。

切れ長の瞳が泣く直前のようにきゆうっと細まり、凜々しい眉がへにゃんと垂れ下がる。

気の強い美貌を切なげに乱し喘ぎ声に明らかな官能の響きが混じりはじめた。なにより少年王のペニスを埋め込まれている膣内が熱い愛液をとぶと溢れさせている。

「は、恥ずかしいのじゃ……こ、こんなの……こんなの初めてなのじゃあつ！」

膨張しきった生殖器官が、とめどなく愛液を溢れさす蜜壺を激しくえぐる。きつく窄まった処女孔を亀頭が強引に押し分けていく爽快感と、腰を引く際肉傘が愛液ごと膣壁を引き抜くような肉悦のハーモニーがたまらない。

フィン強く両手で玲爛の太腿を握り締め、小刻みで激しい突入を開始した。

もう腰が止まらない。限界間近のストロークに全神経を集中させる。

「へ、へんなのじゃあつ！ 目の前が真っ白なのじゃあつ！ き、気持ちよすぎて何も見えないのじゃあつ！ へその奥から何かが来るのじゃあつああああああつ！」

栗毛の東姫は絶叫し引っくり返っている全身を硬直させた。チャイナドレスを着たままの細い身体がビクビクと小刻みに痙攣し、宙を搔くように動いていた両足がその動きを止める。綺麗に並んだ両足の指がギュッと丸まり、ふくらはぎが極上のカーブを描いて盛り上がる。気丈な美貌は官能に乱れフィンの目の前で性に蕩けた表情を晒し続ける。

「あああつ！ もうイクつ！ イッチャうよおおつ！ 姫の中でいっちゃうよおおつ！」

蜜壺が今までとは比べものにならないほど強く収縮した。幾重にも折り重なっている肉壁が剛直している肉棒にきつく密着する。ただでさえ狭かった女性器が、限界までぎゅう

つと強く引き絞られた。そのあまりに強烈な締めつけに腰の動きがピタリと止まる。溢れる愛液をじゅぷじゅぷと泡立たせていた男根を、根元まで埋め込んで絶叫した。

「ぐはああっ！　ちっ、ちぎれるっ！　おちんちんがひきちぎられるっううっ！」

しかし痛みはない。フィンは極限の快感の中で大きく仰け反り全身をブルツと痙攣させた。昂りきった荒々しい獣欲が、太い精液の塊となり男根を内側から貫いていく。

どぐぶびゅっ！　どぶぶぶふっ！　どぶきゅぶぶどぶぶっ！

自分のペニスがその存在感をアピールするように、凄まじい快感を伴いながらドグンドグンと脈動する。少年は全身を息ませながら、高まりきった性欲を思うさま玲爛の中で吐き出していった。

「ああっ、ああっ、ああっ、ああっ、ああっ——ふはあっ……」

迸り続ける精液に合わせてフィンは短い声を発し続ける。そして全てを排出し尽くすとバランスを崩してそのままベッドにへたり込んだ。それまで窮屈な姿勢だった玲爛も、自分を押さえつける相手がいなくなったためにドサリと両足を下に落とす。

二人はそのままベッドの上で激しい呼吸を繰り返しながらセックスの余韻に浸った。

——性欲って……人の性格まで変えちゃうんだな……

何事につけ気弱な自分がよりもよって大華皇国の第一皇女相手に、強引に行為を進めたことが冷静になって振り返ってみると信じられなかった。



——この後が……ちよつと怖いかも……。

先に上半身を起こしたのは玲爛だった。フィンは肩を竦めるようにして身構える。平手打ちの一発ぐらいは覚悟した。しかし栗毛の姫君はいきなり手を上げるようなこともなく、うっとり甘い表情をしたまま自分の胸に頬を乗せてきた。びっくりして顔を上げ相手の顔を覗き込む。玲爛ならではの力強い瞳はうっとり閉じられ眉の角度も緩くなっていた。「妾の言を聞かなんだ男はお主が初めてじゃ」

それはいつもの上から口調ではなく、恋する乙女が想い人に語りかけてるような甘い囁き声だった。

「気に入ったぞ。そなたが西の王座を追われても、妾が東で面倒をみてやろう」

それでも玲爛は玲爛だった。言われたセリフの内容に啞然とし、そして苦笑した。

この人一倍プライドの高い姫君は『バトルベルンの正王妃』の座こそ自分にふさわしいと考え自分のお妃候補になつたはず。その玲爛がフィンが国王でなくなつても『面倒をみてやろう』と言っているということは自分に対し多少の好意は持つてくれたようだ。

「光栄です、玲爛姫。そのときはよろしくお願いします」

そう囁き栗毛の姫君のおでこに優しくキスをした。

その直後だった。玲爛がカッと瞳を開きベッドの脇にあつた扇子を手にする、パチリと鼻先を一叩きされたのだ。ぶぎゃつ、と情けない声をあげ、赤くなつた鼻先を押さえた

少年王を東国姫が一喝する。

「何を覇氣のないことを言っておるのじゃ、この馬鹿者がっ！ そなたは妾の夫になる男じゃぞっ！ バトルベルンの王座程度維持できんでどうするのかっ！」

——王座程度って……。な、なんなんだよ……。一体……。

先ほどの甘いセリフはなんだったのだ。そう思いながら打たれた鼻先を撫でて相手をうかがうと、東国の我が儘姫はなんとも恥ずかしそうな切なそうな表情をしていた。

「……さっきのような場合は、すぎた妾を叱るのが……夫の務めであろう……。それにいつまで他人行儀な呼び方をしておるのじゃ……。れ、玲爛でよいのじゃぞ」

普段の彼女からは想像できないモジモジした口調で囁いている。自分を理不尽に一喝したのは照れ隠しだったようだ。そしてどうやらこの気難しい姫君にも理想の夫像があるらしい。なんだかこの我が儘姫が可愛くってしかたなくなってきた。

「こ、これっ、な、何をニヤニヤしておるのじゃ、こ、この、この無礼者め。わ、妾は大華皇国の第一皇女じゃぞっ。わ、妾はなあ、わ、妾は——」

顔を真っ赤にしながら、自分の血筋がいかによいかを説明しはじめる。

今まで傲慢にしか感じられなかった東国姫の言動がなんとも愛しく感じられる。

フィンには優しく玲爛の肩を抱きながら、彼女の先祖の話聞いていた。

「なっ、なんですってっ！」「誰が正王妃だっ！ わ、私だっ！」

二人が玲爛を挟むようにして自分の前に跪き男根の奪い合いを開始する。

「ち、ちよっと待ってよっ。リオ姉とゼシデリカまで、わわっつ、や、やめて！」

ノックを忘れるほど激しく口論していた内容も今ではすっかり忘れていようだ。

国王執務室が三人の美女の諍いさかう言葉と、それを制止する少年の声でワイワイと騒がしいときにコンコンと扉をノックする音が響いた。

「フィン様。失礼いたします」

香虞夜の声だった。部屋の外から聞こえたその声に室内が一瞬でシーンと静まり返る。今までのいがみ合っていた三人のお妃候補が、突然共犯者の表情になりキョロキョロと視線を交差させていた。さすがにこの三人も正式な許婚であった香虞夜にだけは引け目があるようだ。広いスペースのある机の下に皆で素早く身を隠す。

過剰なまでに大きな国王専用の執務机がこんなときに役にたった。タイミング良く三人が身を隠した直後、香虞夜が部屋の扉を開けた。

「め、珍しいですね。姫がここにいらっしやるなんて」

なんとか心の動揺を表情に出さないようにして許婚の入室に対応する。三人のことが気になるし、いまだに机の下で股間を露出させているのも落ち着かない。

しかし万事控え目な香虞夜がわざわざ王宮まで足を運んで尋ねてきたのだ。すぐに追い

返すわけにもいかなかった。

——いざとなったら、王の執務を理由にして出てもらおう……。

「フィン様にお時間ができたようだ」とエルダ様からうかがったので邪魔しました」

——うぐうっ……。

これで仕事を理由に追い返すわけにもいかなかった。自分の全てのスケジュールを後宮長が管理していることは彼女もよく知っている。そして改めて香虞夜の表情をうかがうと、いつにもまして思いつめた顔をしていた。かなり緊張しているように見える。

「なんでしよう、何か折り入ってお話でも——ひひゃっ!？」

フィンが突然あげた奇声に、それまで硬かった香虞夜の表情がキョトンとなった。

「どうかされましたか？」

首を可愛らしく斜めにして尋ねてくるフィアンセに、なんでもありません、とこたえちゃりと視線を机の下に向ける。

玲爛だった。いまだに剥き出しになっているペニスにキスをしている。

——こ、こんなときに、何するんだよおっ。

栗毛の姫君を左右から挟むようにしている女騎士とシスターも驚きの表情でそれを見ていた。場合が場合である。それも当然だ。

(くふううんっ。唇が火傷しそうなほど熱いのじゃ)

玲爛がなんとかギリギリ、フィンの耳に届く程度の小声でそう呟くと、周りの目などにせずにレロレロと肉先を舐めてきた。敏感な肉先で感じる女の舌のぬめった感触に思わず、くああっ、と声を漏らしてしまう。

「フィン様？」

香虞夜の声が不審げなものになっていく。

「な、ななんでもありませんよ」

慌てて微笑んだ。そんな少年王の声に反応したのは黒髪の姫君だけではない。

（私も……フィンが気持ちよくなることとしてあげたい）

（こ、こらっ、二人とも。陛下がお困りではないか……。……わ、私もっ）

リオネッセとゼシデリカが玲爛に負けてはならぬと男根に口を寄せてきた。

れるおんっ、むちゅムチゅ、ぺろろろっ。

ペニスを舐める肉片が三枚になる。形も動きもぬめり方も違う三種の舌が最も感度の高い肉器官を這いはじめた。その強烈な快感が背筋をビリビリと駆け抜けて脳天まで突き抜ける。男根を口で奉仕されるのは初めてだ。セックスとは内容の違う快感に、両足の指をキユッと丸めてなんとか耐える。どこかに力を込めていないと喘ぎ声が漏れてしまう。

——くうっ……。き、きもちいいよお……。

全身の感覚が勃起した。ペニスの先端に集中していく。

先端の小穴を舌先で穿るように舐めているのは玲爛だろう。舌の動きが大胆でとても滑らかだ。房中術の一つとして練習した経験があるのかもしれない。

対照的にぎこちなく男根の左側面に舌を這わせているのは位置的に考えてゼシデリカだ。舌のサイズも最も大きく舐める圧力が一番強い。ということはペニスの左半分をペロペロと子犬がミルクでも飲むように舐めているのはリオネッセということになる。舐める感触がとても優しく舌のサイズが最も小さい。

——あ、あの三人が今、僕のおちんちんを舐めてるんだ……。

お妃候補たちによる熱心なトリプルフェラの淫靡な光景が脳裏に浮かび、ますますペニスの硬直が強まる。肉先を舐める巧みな舌捌きによってペニスの芯からジワッと滲み出す肉悦を感じながらも、肉胴部分を左右から舐める不器用であつたりソフトすぎる舌の動きによって焦れつたさまで同時に刺激される。

「あの、本当に大丈夫ですか？ お顔が赤くなってますけど……」

心配そうな香虞夜の声に意識を下半身から上に移した。フィンの身体に異変を感じたフイアンセが巨大な机を迂回してこちらにこようとしている。

「ただだ、ダイジョウブですつ、あ、あの大丈夫ですつ！」

北国姫の行動を両手を上げて慌てて制する。

「ですけど……声も震えていますし……額に汗も……」

黒髪の姫君は形よい眉をソッと寄せ、その美貌を曇らせる。心底フィンの身を案じているようだ。それだけにこちら側にまわってこられてはなおさら困る。肉欲に溺れそうだった理性をなんとか叩き起こして、頭をフル回転させた。

「そ、それは……姫と二人つきりになってしまつて、その、ドキドキしてるためです」

咄嗟にそう口にしていた。我ながら上手い言い訳だ。生来口下手な自分とは思えない。

「フィン様……」

それまで心配で曇っていたヤマトナデシコの顔がほころんだ。嬉しさと恥ずかしさが入り混じり白い頬がほんのりと桜色に染まってく。

——やっぱり香虞夜姫って可愛いなあ……。

フィンの表情がデレッと緩んだ。——その直後だ。

びちゅびちゅぬくるっ！　ぺゅれろろっ！

一定のペースで男根に絡みついていた三枚の舌が狂ったように激しく動きはじめた。

(なんじゃ、……れるむちゅっ……そのだらしない顔は)

玲爛は舌先を尖らせ尿道に捻じ込むように舌を躍らせ、ゼシデリカの大振りな舌が肉幹の根元から肉傘部分までを勢よく往復し、リオネッセの小さな舌が肉胴に浮く血管をなぞるように満遍なく舐め回してくる。

(親衛隊隊長の私とは、……んはんっ、……いつも一人つきりだったのに……むちゅっ、

そんなお言葉一度もっ……」

まるで直接背中を舐め回されているように、ゾワゾワと背筋に快感が駆け巡る。フィンはビクンと身体を痙攣させて思わず漏れそうになった快感の声を、両手で口を塞ぐことでなんとか抑えた。視線だけをチラッと股間に向ける。

（よく考えたら……んはんんっ……まだ私っ……フィンと恋人同士の会話をしてないわ）
地位も名声もこの大陸屈指である三人の美女が明確な怒りをその瞳に宿して自分を睨み上げている。そしてその怒りをぶつけるように激しく舌を躍らせていた。玲爛が執拗に龟头を責め続け、リオネッセとゼシデリカが肉胴を上から下まで舐め回す。

このままではマズイと考え、なんでもいいから言葉を口にする。

「あ、あの、香虞夜姫はどういった御用で？」

その問に北国姫の表情が緊張した。やはり何かを覚悟しているような表情を見せる。もともとが意思の強そうな顔をしているだけに、その美貌が更に映えた。

「実はフィン様に確認したいことがあります」

黒真珠のような美しい瞳が、何かを吹っ切り決断をしたような力強い輝きを放つ。

「な、なんででしょう」

その迫力に少年王は背筋をピンと伸ばした。しかし机の下を見れば、股間をだらしなく露出させ剥き出しのペニスを三人のお妃候補に舐め回されているのだ。上半身と下半身の

ギヤップにゾクゾクと背筋が震えてしまう。

——いけないことなのに……。なんかたまんなく気持ちいい……。

凜々しい表情を見せる目の前の婚約者を裏切っている罪悪感にどっぷりと浸る。それが昂りはじめた官能と複雑に絡みあいトリプルフェラの快感を更に高めていく。

今ではフィンの弱点がこと気付いたようでゼシデリカとリオネッセの二人まで肉先に舌を這わせている。割礼されて剥き出しになっていく亀頭部分に熱い肉片が三枚激しくへばりついていた。正面の玲爛が肉先の小穴を執拗に舌先でつつき、左右のゼシデリカとリオネッセが僅かに空く隙間を埋めるように左右から尿道を舐めてくる。敏感な肉器官が唾液の熱さとしなやかな舌の感触を感知して背筋の痙攣が止まらない。そのあまりに淫靡な肉悦に理性がジワジワと侵食されていく。

「エルダ様とお話をしているときに聞いたのですが、……フィン様は他のお妃候補の方とはすでに親密な関係になつていのではないのかと」

——ま、またエルダさんか！

後宮長はフィンと彼女たちの仲を進展させるために、他のお妃候補との噂をリークしまくっているようだ。

「そ、そんな、こと、あ、ありませんよ」

あからさまに震えた声でこたえていた。質問の内容に動揺しただけではなく、肉先を這

い続ける三枚の舌がもたらす快感のためでもある。

その声の不審な響きを聞いて香虞夜の美貌がはつきりと曇る。

——ま、まずいっ。今のじゃ嘘がバレバレだよっ！

しかし平時ですら嘘は大の苦手である。心身ともに切羽詰まっているこの状況で上手く頭が回るわけがない。しかし北国のヤマトナデシコはそれ以上、深く追及してこなかった。

「……フィン様がそうおっしゃるなら、香虞夜はそれを信じます」

そのセリフに少年王は目を丸くした。ペニスをむしゃぶっていた女たちの舌もピタリと止まる。私の強い彼女たちでは考えられない答えだったからだろう。

「私はまだ……フィン様のお妃候補の一人なんですよね？」

黒髪の姫君が切なそうな表情でそう問いかけてくる。

「と、当然です！」

フィンはきつぱりと言い切った。三人がかりの舌責めが中断されたので、腹の底からしつかりと声が出た。その張りのある返答に香虞夜の顔が少しほころぶ。

「それではフィン様にお願ひがあります。あ、あの……接吻——この国では……キスというのですよね……、そ、その……私にくちづけを……していただけませんか？」

「恥ずかしそうにそれだけ言うのと、ヤマト姫がほんのり頬を桜色に染めて俯いた。

「は、はひっ？」

「エルダ様に聞きました。西の習慣で将来を誓い合った男女は唇を重ねる習慣があると」
「は、はあ、まあ……た、確かに……」

どうも結婚式の際、新郎新婦が最後に誓いのキスをすることを言っているようだ。

「数いるお妃候補の中から、私を正王妃に選んでくださいとはいいません。ただたとえ私を妃としなくても、フィン様のお側に末永く置いていただきたいのです。我が儘なお願いなのは承知しています。ただ数いる愛妾の末席にでも……私を残していただきたい……」

「か、香虞夜姫……」

あまりに謙虚なヤマトナデシコの心意気にフィンは感動していた。その言葉には小国である祖国安泰の思いが多少は含まれているのかもしれない。ただ、たとえそうだとしても胸を強く打たれていた。どんな理由があるにせよ、女の子が自分をこれほど慕ってくれば男として感動せずにはいられない。ましてや相手は透明感漂う美貌の姫君なのだ。

フィンは深く考えることもなく、はい、と頷いていた。

「香虞夜姫と……僕も一生を共にしたいです」

と、その直後だった。

「——っふうっ!?」

中断されていたトリプルフェラが再開された。

ぐちゅにゆるっ！ れるむちゅっ！ ちゅぼぼむちゅううっっ！

今まで以上の激しさだった。しかも今度は舌だけでなく唇まで使っている。三枚の舌で舐め回されるだけでも耐え難い快感だったのに、今は更にその上をいっていた。

——た、たままないっ……おちんちんがとけちゃうよおっ……。

肉棒全面をプリプリした唇にへばりつくようにねぶられて、肉先が唾液に溢れた熱い口内に飲み込まれる。男根から迸る快感に顎が仰け反りそうになるのを必死に耐えた。

(このような状況で……むちゅんっ……よくぞ言ったものじゃな……)

東国のプリンスに唾えられている肉先は強く吸われ、舌や唇がべったりと密着した状態でねぶられ続けている。

(香虞夜さんまで……んんんっ、お嫁さんにしようとするなんて、欲張りな子ねっ)

(へはああんっ……陛下がそれを……お望みなら……むちゅうううっ……で、でも……)
幼馴染みと初恋の女性が自分のペニスを間に挟んでディープキスをするように唇を重ね合わせていた。左右から同時に肉棒を圧迫されているため、まるで締まりのよい膣口に絞り込まれているようだ。

——た、たままないっ……も、もう……イッチャいそう……。

あまりの肉悦に膝がカクカクと震え、肘掛を掴む両手に限界まで力が籠もる。突発的に目の前が官能の閃光で白くなり、喘ぎ声を漏らさないため強く下唇を噛み締めた。

やはり何事も時と場合がある。さすがにこの状況で、本心から力強く即答したのは失敗

だったかもしれない。

「あ、あの……」

香虞夜は顔を俯けて両手を腰の前辺りでモジモジさせている。くちづけをして欲しいと哀願したが、さすがに自分からするのは恥ずかしいのだろう。しかしフィンもまさか今の状態で椅子から立ち上がり彼女を抱き締めるわけにもいかない。しかたなく片手を伸ばした。

「姫……そのまま……くうっ……ま、前に……」

その言葉に黒髪の姫君が上目遣いで座っているフィンを見詰めてくる。おずおずと近づいてくる許婚がとても可愛らしい。普段ならば一っと見惚れ自分もつられて顔が赤くなる局面なのだが今は状況が悪すぎた。

(なんなんじゃ……れくちゅうんっ……このおぼこいやりとりは)

本来なら心ときめく光景に、たまらなく淫欲を掻き立てられる。

パージンを奪った三人の美女に口腔奉仕をさせながら、長年のフィアンセとファーストキスをしようとしているのだ。自分がとんでもない悪者に思えてしまう。

——いけないことだって……わかってるのに……。

そのネガティブなイメージは肉欲を萎えさせるどころか、ますますペニスを猛らせた。

「ふ、ふつつか者ですが……どうかよろしくお願いいたします……」

香虞夜は顔を真っ赤にして身を乗り出してくる。緊張の極致のためか机越しの姿勢の不

自然さを特に気にしている様子はない。

——香虞夜姫っ……ゴ、ゴメンなさい……、ぼ、僕は……。

少年王は過去に経験したことがないほど心臓をバクバクさせながら近づいてくる許婚の美貌を見詰めていた。香虞夜の凛々しい顔がまさに目と鼻の先にくる。二人は顔を赤くしたまま視線を合わせていた。黒真珠のように美しい濡れた瞳がジッと自分を見詰めている。

「あ、あの……姫っ……」

「……な、なんでしよう」

「目、目を……その……閉じて……ください……」

「えっ？」

「あ、あの、普通キスをするときは……目を閉じるものなのです」

後宮長に教えられた作法を口にする黒髪の姫君は耳まで真っ赤になって、意味もなく両手を身体の横でパタパタと上下させた。その仕草があまりに可愛らしくって強烈な愛おしさが胸に溢れてくる。

「すすすす、すいません！」

香虞夜は暫くあたふたとしてからギュッと目を閉じた。これで少なくとも机の下の三人を見られる心配はなくなる。フィンはそれでも恐る恐る椅子から立ち上がった。

(ああんっ……フィン様っが……ぱくちゅんっ)



机の下の三人は動きを合わせフェラチオを続行してくる。緊張でガチガチになっている香虞夜でなければ明らかに気付くほど、ペチャペチャと盛大な音を響かせながら三枚の舌が猛りきった男根を舐め回していた。

ゼシデリカの大振りな舌が肉先の小穴を激しく穿った直後、玲爛のよく動く舌がその周りを舐め回し、リオネッセの小さな舌がその隙間を縫って絡みついてくる。男の理性を舐め溶かすには十分すぎる肉悦だった。

(フィンので……くゅむちゅつ……お口が火傷しそう……)

少年王が三人がかりの口腔奉仕を受けながら、それでもなんとか射精を耐えヤマトナデシコの唇に唇を重ねようとした直前だった。

「フィン様……私一生……あなたに尽くします……」

そのセリフを聞いた直後、フィンの脳天を凄まじい罪悪感が打ち抜いた。

——ごめんなさいっ香虞夜姫っ！

亀頭をむしゃぶられ裏筋に熱い舌を這わされている快感と、ドス黒い罪の意識が混じりあい少年王の意識を塗り潰す。気付いたときには片手を上げて香虞夜のうなじを強く掴み、深く唇を密着させていた。

「んんっ、……んんんんっんっ!？」

許婚とのファーストキスは情熱的なものとなった。黒髪の姫君が驚きの声をあげるが手

の力を緩めることができない。香虞夜に対する愛おしさと罪の意識が頭の中で激しく乱反射して脳裏を真っ白に焼き尽くす。踏ん張り続けていた全身から力を抜き、三人がかりのフェラチオの快感に全神経を解放させる。

——イクっ！ イッチャうっ！ 皆のペロがあっ、香虞夜姫の唇があっ！

三人分の涎でベトベトになった肉棒の中を凄まじい勢いで背徳の肉悦が駆け抜けていく。どびぶっどぶぶっ！ どぐどりゅどぶぶっ！

男性器の噴出口で踊り狂っていた三枚の舌を弾くように射精していた。

ただ一人事情を知らないフィアンセと長くファーストキスを続けながら、下半身では盛大に肉欲を爆発させている。背徳の射精はとめどなく続き、今まで味わった快感とは明らかに異質なドロドロした黒い官能でフィンの全身を焼き尽くしていく。

「——っん……ふはあっ……」

フィンは完全に射精を終えてから、がっちり握り締めていた香虞夜のうなじを解放した。すでにペニスをむしゃぶりまわしていた三人は股間から離れ机の下に避難しているようだ。男根もちゃんと服の中に仕舞われている。しかし——。

（ま、まずくないか……。陛下のお種の匂いが漂っているぞ……）

その通りだった。射精の余韻から醒めた少年王は恐る恐る婚約者をうかがう。黒髪の姫君は顔を桜色に染め恥ずかしそうに視線を伏せているだけだった。どうやら精液の匂いに

は気付いていないらしい。多少生臭い匂いがしても、その匂いがなんなのかわからないのだろう。

「少し……驚きました」

香虞夜が恥ずかしそうにポツリと呟いた。強引なフィンの行為によって乱れた黒髪を手櫛でなおしている。その仕草がとても色っぽく見えた。盛大な射精をしたばかりだというのにムラツと牡欲を刺激される。

「ごめんなさい……姫があんまり綺麗だったから……我を忘れてしまいました」
そのためだろう。普段なら絶対口にしらないようなキザなセリフを口にしていた。

「いやだ……フィン様ったら……」

香虞夜がますます赤くなっていく自分の頬を両手で隠し、上目遣いで恥ずかしそうにこちらを見詰めてくる。その可愛らしい仕草と表情に鼻の下がでれんつと伸びた。

「えへへへっ……ぐぎゃっ!」

両足の甲に激痛が走った。視線を下に向けるまでもない。机の下にいる三人に足を踏みつけられたのだろう。

「どうかされましたか?」

「……恵まれすぎている僕に、天罰が下ったようです」
引き攣った笑顔でそうこたえた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>